

# 口丹 随想

昨年は原発事故に象徴される「絶対神話」が崩壊し、「思考しない社会」の行き末が見えたように感じた。今こそ多角的に物事をとらえ、人と人、地域と地域など、連帯の中で答えを導いていける人材や術が必要ではないだろうか。

京都府が命の里事業として昨年6月から開講している「地域コトおこし実践者講座」は、府中部・北部の農山村地域で活動するリーダーを対象に、課題解決のために行動を起こすこと（コトおこし）を通して、自立的な地域再生活動に取り組む人材づくりを目指している。講座は福知山市などを中心に開いている

## つながりが生む未来

が、昨年11月には京丹波町の道の駅「和」で行った。

職業も地域もさまざまな人々が集まる講座のメインは、観光や定住などの六つのテーマに分かれて取り組む実践プロジェクトだ。その中で亀岡、南丹、京丹

コーディネーター



波2市1町から参加する受講生を中心につくるのは「修学旅行の受け入れと地域経済」のグループである。

これは南丹市美山町で「グリーンツーリズム」（農山村での体験型休暇活動）に取り組んできた人たちを母体に、本講座から加わっ

たメンバーが入り、農家民宿や地域体験などを組み合わせた「南丹ならではの観光プログラム」を企画開発するのが目標だ。

講座では、受講者同士が話し合い、実行する。グループごとの進捗を報告しあう場や、ゲストによるト

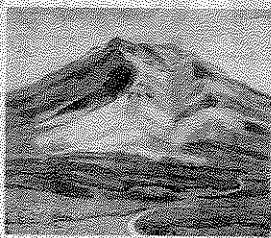
### 小鹿由加里

ク、アドバイザーが参加するミーティングもある。受講者はさまざまな角度からテーマに共感する人々や、他地域で活動に取り組む人々と出会い、思考や知恵を交換していく。

こうした講座を軸に、自身はさらに目指したい方向がある。特定分野の人間だけで課題を考えると、どうしても行き詰まりがちだ。食糧問題をデザインの

視点で解決を試みたり、福祉の視点で観光を考えると、いろいろな、人や専門分野が交差するような場から、新たな道を見つめる手法を活用したい。

大学時代からダンスの制



旭岳山上和雄  
(亀岡油絵懇話会)

作者として活動してきた私は、さまざまな課題に対して「芸術」という視点を持つ。

1977年愛知県出身。京都大農学研究科（農村計画）修了。在学中からダンスを始めた。農学と舞台で培った視点を生かし「芸術と農」をつなぐ催しなどの企画制作に携わる。2011年から京都の大学や経済団体など産官学民でつくる一般財団法人「地域公共人材開発機構」のコーディネーターとして、人材育成に携わる。

ち込めないかと考えている。芸術家たちは、作品や活動を通して既存の概念にゆさぶりをかけてくる。こども見えなしか、ああも見えなしかと訴えてくる。その触発から、複数の考え方が生まれ、真実をみつける時もあるのではないか。

人と人が出会い、情報を発信・共有する場をつくる。そこから個人の視野が広がり、思考を深めることを通じ、現状を切り開く力や、自立したコミュニケーションづくりへとつながる。そんなお手伝いができて、丹波の地に豊かな未来が見えてくることを、新年に願う。